特　集

オンラインでの教育史の授業実践とその課題

桑　嶋　晋　平

1．はじめに

本稿では，2020年度前期にオンライン（リアルタイム型[1]）で実施した教育史の授業実践を記録するとともに，オンライン授業にかかわるいくらかの論点や，今後の課題を提示したい。なお，2020年度前期は，教育史とともに教育制度／教育学概論Bの授業も担当していたため，必要があれば，そちらの授業での経験についてもふれる。

前期の授業は，試行錯誤しながらの実施になり，不備ばかり目立つものであったようにもおもわれる。そのようなものを書き残すことに，いささかの躊躇いがないわけではない。しかし，今後しばらくは全面的な対面授業の実施が困難であると予測されるなか，授業の記録を残しておくことは，今後の授業実践に，ひいては，大学教育のあり方を再考することに寄与しうるだろう。

以上のことから，本稿では，まず授業の実施形態について簡潔に述べたうえで，授業開始時におこなった簡単なアンケートから，学生の機器や通信環境をめぐる状況についてふれ，そして，どのような授業づくりをおこなったのか，またそこからいかなる課題がみいだされるのかについて書き記しておきたい。

2．授業の実施形態について

まず，どのように授業を実施したのかについて，ごく簡潔に記しておく。2020年度前期に担当した教育史（および教育制度／教育学概論B）の授業は，Microsoft Teamsを利用し，同時配信のリアルタイム型で実施した。Teamsを利用したのは，当初推奨されており，教員・学生へのサポートも充実していると判断したためである。もちろん，どのようなツールを使うかはそれ自体授業のあり方を規定する側面がある。しかし，教員・学生ともにオンラインでの授業になれないなかでは，不測の事態に対処しえる可能性が高いものを利用することがよいようにおもわれた。

授業を開始するにあたり，リアルタイム型でおこなうか，それとも録画した動画などを配信するいわゆるオンデマンド型でおこなうかは，かなり悩ましいところであった。学生の通信環境がどの程度整っているかがみえない状況では，リアルタイム型で実施することにより，授業を十分に受けることができない学生がいる場合がかんがえられたためである。しかし，いくらかの双方向性や協働性を確保できるのではないかというみとおしもあり，リアルタイム型での実施とした。

つぎに，授業のすすめ方について一定ふれておく。授業においては，パワーポイントにて作成した資料を事前にWebclassおよびTeamsにて配布し，授業中は画面共有しながら授業をすすめた（図１参照）。また，すべての授業回で，授業後

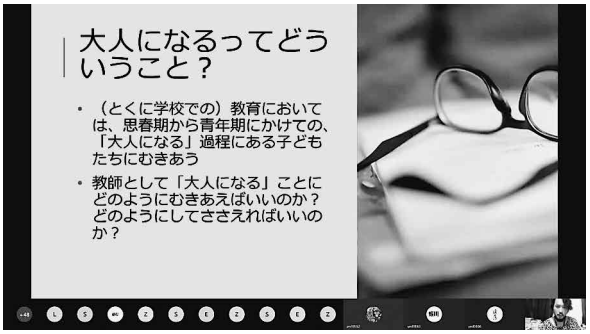

図１　授業の様子

にフォームを利用して，課題（こちらで提示した課題や授業へのコメント）を課した。

質問や要望にかんしても，フォーム内に欄を用意した。フォームを利用したのは，スマートフォンなどで受講している学生が一定数いることが予想されるため，当面，アクセスがしやすく，そのままうちこめるフォームをもちいたほうがよいとかんがえられたためである。

フォーム以外にも，質問や要望などがあれば，Teamsのチャットやメールアドレスに気軽に送るようにと伝えた。オンラインでの授業という慣れない環境で，さまざまな困難をかかえる学生がいることが想定されたためである。とくに，授業にはいることができないなどの緊急性が高い問題にかんしては，チャット機能があることで，一定対処することができたケースがあった。

課題については，次回の授業の冒頭にこちらでピックアップしたものを提示して紹介や共有をおこなった。また，質問や要望についての応答もできるかぎりおこなうようにした。

３．学生の機器・通信環境

学生の状況を把握するために，第１回の授業終了後，どのような機器をもちいて受講しているか，どのような通信環境で受講しているかについて，ごく簡単なアンケートをおこなった。

機器にかんして，教育史の受講者は，74.3％の学生がパソコンで受講，スマートフォンが18.6％，タブレットなどが7.1％であった（教育制度／教育学概論Bは，パソコンが64.6％，スマートフォンが25％，タブレットなどが10.4％であった）。通信環境については，携帯電話会社の回線が4.3％（教育制度／教育学概論Bでは，4.2％）で，残りは，ブロードバンド回線やwi-fiルーターで接続しているという結果であった。

この数値が，全体的な傾向なのかどうかはわからない。受講者によって相当変動する数値であろう。また，おそらく，前期期間中に，機器の購入や，ブロードバンド回線の契約をした学生もいただろうから，数値もかわってくるだろう。それゆえ，この数値自体は，いまではさしたる意味はない。

ただ，初回の授業がおわった段階でアンケート結果をみたとき，スマートフォンで受講する学生がけっしてすくなくないことは，看過すべきでないようにおもわれたし，携帯電話会社の回線を使用して受講している学生がすくなからずいることも見逃すべきでないようにおもわれた。通信制限がかかった場合，十全に授業をうけられない可能性が生じるからである。

それでは，こうした問題が懸念されるなか，実際に授業づくりをどのようにおこなったのか。また，そこからどのような課題がみいだされるのか。節をかえて，記しておきたい。

４．授業づくりとその課題

ここでは，授業づくりをどのようにおこなったのかについて記し，そこからみいだされる課題（反省もふくめて）を述べておきたい。なお，以下では，とくに，１つ目に資料づくり，２つ目に授業の時間配分やメリハリといった授業デザイン，３つ目に，双方向性や協働性の確保に焦点をあてる。ほかにも記しておくべきことはおおくあるが，とくに前期は，筆者自身が，これらのことに重きをおいていたからである。

４．１　資料づくりという課題

まず，授業の資料づくりについて記しておく。さきにも述べたように，授業では，基本的にパワーポイントで作成した資料を事前にpdfで配布し，当日は画面共有をおこなった。

資料を画面共有する際には，スマートフォンな

どで受講している学生がすくなからずいることをふまえると，やはり文字のポイントを一定おおきくしておく必要があるようにおもわれた。授業では，おおよそ28ポイントを使用し，強調する場合は赤字や下線を使用した。これが適切かはわからないが，学生のコメントをみるかぎり，文字のおおきさにかんしては，問題がなかったようにおもわれる。

そのうえで，オンライン授業でパワーポイントなどのプレゼンテーションソフトを使用する場合，文字情報をどの程度のせるかという問題があるようにおもわれた。パワーポイントなどを使用する場合，最低限の情報をのせておき，口頭で補足することが一般的であろう。けれども，オンライン授業の場合，たとえば通信の問題などで音声が途切れる場合があるだろう。また，これはほかの大学であったケースだが，聴覚に障がいがあるなどの理由で，合理的な配慮が必要な学生がいた場合には，文字情報で一定授業のながれや話していることをしめすことが重要になる。

ただ，学生の反応をみるかぎり，この点には賛否両論があり，文字情報がおおいという反応もすくなからずあった。パワーポイント資料とはべつに，授業の内容を文章化しておいて，それを配布しておくという対応もありえるだろう。あるいは，現在では，リアルタイムで字幕を自動作成するソフトウェアもあるため，それを使用する対応もありえるかもしれない。しかし，前者の場合，学生が資料と画面を行き来することになるし，印刷にかかわる時間的・経済的な負担という問題も生じうる。後者にかんしては，授業外でいくらか試行したが，技術的な問題から，実際にはおこなわなかった。

これらのことは，今後の課題であるけれども，ここでは，とくに印刷の問題にかんして，資料づくりと関連させながら，すこしばかりふれておきたい。

普段の授業でも，パワーポイントをもちいているが，その際には，パワーポイントの資料および補足的な資料を印刷し，配布するなどしていた。補足的な資料とは，たとえば，授業で実践記録を読む場合や，歴史資料などである。しかし，オンラインの授業においては，補足資料にかんしては，基本的に拡大などの編集をくわえたうえで，パワーポイント上で提示するようにした。

なぜ普段ならば別途で配布する資料をパワーポイント上で提示したかといえば，学生の学習環境の問題をふまえると，そのようにすることがのぞましいとかんがえられたためである。普段であれば，資料にかんして学生に時間的・金銭的な負担をかけることはほとんどない。しかし，オンライン授業である以上，印刷などの負担は，学生が負うことになる。通信環境の整備や，パソコンの購入などで金銭的な負担がかかっているだろうし，また，しばしば報道されたように，アルバイトなどでの収入が減少した学生もすくなくなかっただろう。そうした状況で，学生におおくの負担を強いることは，やはり避けるべきことであるようにおもわれた。

たとえば，授業が開始された当初，「この授業では資料を印刷する必要がありますか」といった質問がみられた。プリンターを所有していない学生にとっては，コンビニエンスストアで印刷するなど時間的・金銭的な負担がかかることになるし，プリンターを所有していたとしても，おおくの授業で資料を印刷することになれば，インクやトナーを半期のあいだでも何度か購入する必要が生じるかもしれない。

資料は基本的にデータで送られるのだから，それを別画面やタブレットなどでひらいておき，適宜それを確認し，あるいは画面上でメモを付しながら，授業をうけるということも可能ではあろう。けれども，スマートフォンなどで受講している学生や複数の端末を所有していない学生が一定

数いることや，そうした操作に学生がなれている保障があるわけではない以上，やはり，１つの画面上で，資料を提示し，授業をおこなうことが適切であるようにおもわれた。

いうまでもなく，ここで述べたいのは，学生に資料などの印刷を課すことへの非難ではない。それが必要な授業は当然あるし，印刷資料をもちいることで学習がよりよいものになるのであれば，そうすべきである。教育史および教育制度／教育学概論Bの授業にかんしては，印刷を課さないかたちで実施した，ということに過ぎない。

ただ，今後，学生自身の収入の問題も然ることながら，保護者などの収入が減り，学習や生活に困難をかかえる学生が生じることは十分にありえることである。そうしたなかで，どのような支援をおこなっていくのかは，重要な課題であるようにおもわれる。

４．２　オンライン授業での時間配分という課題

つぎに，授業において，90分という時間をどのようにつかうのか，という点について記しておきたい。この点も，学生の学習環境という問題とかかわるのだが，オンライン授業が実施される場合，学生は１日のけっしてすくなくない時間，パソコンなどの画面にむきあうこととなる。対面形式での授業とオンラインでの授業で，たとえば「授業に集中する」といわれるようなことがらに，どの程度のちがいが生じるのかは，よくわからない。ただ，４月にオンラインでの授業づくりをかんがえていた際には，やはり90分，それも１日に複数の授業をパソコンなどの画面上で視聴するということには，それなりに困難がともない，時間配分上の工夫が必要であるようにかんがえていた。

ただ，実はこの点にかんして，基本的な授業づくりのかんがえ方は，普段とそうおおきくかわったわけではない。表１にしめしているのは，教育史（および教育制度／教育学概論B）の授業におけるおおまかなながれである。おおよそこういったながれでつくっているというイメージであって，授業ごとにさまざまな差異はあるし，さほど目新しいものではなく，ごく一般的な授業のながれかもしれないが，授業づくりにあたっては，90分という授業のなかでいかにメリハリをつけるかを意識的におこなっている。実際の授業では，はじめに授業のながれや目標を一定説明し，導入，展開といったそれぞれのユニット（とさしあたりいっておく）ごとの冒頭にも，それぞれのユニットごとのながれなどを説明するようにし，ユニットの転換，切り替えをはっきりとするようにしている。

また，こうした授業づくりの一環として，授業途中には，個々人のかんがえをまとめることや，グループでのディスカッションやワーク，また，数人にあてて発表する，などをおこなってきた。前期にかんしては，Teamsにグループでのディスカッションするような機能が実装されていないため，のちに述べるチャット機能をもちいた意見の共有，実践記録などの資料や，視聴覚教材をもちいることを中心とした。聴く，観る，かんがえる，書く，話す，といった活動を複数とりいれ，メリハリをつけることで，90分の授業であって

表１　授業のながれのおおまかなイメージ

0分～5分	5分～10分	10分～20分	20分～25分	25分～45分	45分～55分	55分～75分	75分～80分	80分～90分
授業のながれや目標の説明	質問や要望などへの回答	前回の課題にたいする回答の紹介と共有	授業の導入	授業の展開①	資料や視聴覚教材、グループでの活動、意見の共有や議論など	授業の展開②	本時のまとめと次回の予告	課題や質問の記入

も，一定集中を保ちながら学習をすすめられるだろう。

とりわけ，オンライン授業においては，90分の時間でいかにメリハリをつけるかという点は，きわめて重要な課題である。学生が長時間，１人で画面にむきあうことも理由の１つであるが，同時に，このことは，教室での対面形式の授業と，オンライン授業における教師の身体やふるまいのちがいという点にもかかわっている。とくに，パワーポイントの資料などを画面共有し授業をおこなう際には，画面の大半に資料が提示され，教師の顔やふるまいは，うつらないか，うつるにしてもそうおおきくはない画面になる[(2)]。そうなると，学生の目の前にあるのは，文字情報が中心となり，場合によっては，代わり映えのしない画面を長時間見続けることになる（この点は，資料づくりの課題ともかかわる）。いかに表情やふるまいを前景化させるか，あるいは，その代替をかんがえるのかは，オンライン授業における重要な課題であるし，こういってよければ，授業における教師の身体性のありようが，オンライン授業の只中で，あらためて問われているようにもおもわれる。

４．３　双方向性や協働性の確保という課題

オンライン授業において，双方向性や協働性[(3)]をいかに確保するかという課題は，前期が開始される以前から，さまざまに指摘されていた。教育史という授業（あるいは，教育の制度にかんする授業）の場合，もちろん歴史的な（あるいは制度的な）ことがらについて，それ自体を学ぶことは重要であるし，必要不可欠である。しかし，同時に，歴史（あるいは，ときには「わたし」とは疎遠なものにもみえる制度）の問題を，いま現在の自己や社会とのかかわりでかんがえることも重要とかんがえている。

そのうえで，歴史や制度にかんする知を介しながら，論争的な問題に協働してとりくむことは，重要なものとなるだろう。教育の歴史や制度を学ぶという意味でも，さきに述べた授業の時間配分やメリハリという意味でも，双方向性や協働性の確保は，重要な課題であるとかんがえてきたし，オンライン授業であっても，それはかわらない。それでは，前期の授業では，どのようにして双方向性や協働性を確保したのか。

双方向性や協働性を確保するため，１つ目に，授業中には，なにか質問などがある場合，チャット機能を利用したり，あるいはマイクをオンにするなどして，なげかけてもらってよいことを毎時冒頭につたえていた。ただ，授業中の質問というのは，そこまでおおいわけではなかった。むしろ，さきに述べたような，フォームの質問欄に，かなりおおくの質問がみられた（城西大学では今学期から授業を担当しているから比較できないが，他大学では，昨年度までの教室での授業に比して，質問がかなり増えていた）。授業によっては，質問への回答に20分以上かけた場合もある。質問の内容は，さまざまだが，授業の核心をつくものから，自身の経験（たとえば塾講師をしている経験）と授業をかかわらせたものもあった。あるいは，教員になるかという進路にかんする質問もおおくあった。質問にうまくこたえられていたかはよくわからないが，オンライン授業で質問がしやすくなったという傾向があることからすると，質問などをうながし，それにこたえる時間を設けるということは，重要であるようにおもわれる。

２つ目に，前期にかんしては，Teamsの授業であったから，授業内でのグループでの活動などは，おこなえなかった。それゆえ，チャット機能を使用し，いくらかの双方向性や協働性を確保することを試みた。たとえば，質問を投げかけ，チャットに回答を送信してもらう，あるいは，意見がわかれそうな２択を用意し，チャットに自身の

立場を書き込んでもらうことをおこなった。たとえば，教育制度／教育学概論Bでの例になるが，不登校問題をあつかった際に，「不登校はないほうがよい／不登校はあってもよい」という２つの相反するかんがえをとりあげ，どちらの立場を支持するか，数行程度の簡単な理由も付して，チャットをもちいて回答を送信してもらった。その際，チャットにアンケートフォームを投稿し，回答をグラフであらわすことができる機能を使用した。授業後の感想をみると，ほかの学生が書いた理由に触発されたものもすくなくなかった。また，ほかの学生のかんがえを聞けたことそれ自体が学習のうえで刺激になったとのコメントもみられた。

とくに，オンライン授業では，教室とはことなり，基本的に学生は自宅などで，１人でパソコンなどの画面にむかうことになる。そうしたなかで，他者のかんがえに耳を傾けたり，共有する時間をもうけることは，学びをふかめることにつうじるとともに，他者とのかかわりという，こうした状況でなければ日常的にありえた機会を創出するという意味でも，重要であるようにおもわれる。

５．おわりに

これまで，2020年度前期の教育史の授業づくりにかんして，いくらか記録を記すとともに，課題を述べてきた。総じていえば，前期の授業においては，学生がいかなる状況にあるかを事前に十分に把握できなかったため（できていた教師などいないだろうが），いかに学ぶ機会を保障するか，という点に重きをおいていたようにおもわれる。そのため，本稿での記録は，資料づくり，時間配分やメリハリ，双方向性や協働性の確保といったことがらが中心になった。本稿ではふれられなかった点（たとえば，課題にかんすることなど）もおおくあるが，この点は，べつの機会にかんがえたい。

〔注〕

（１）本稿では，教育史および教育制度／教育学概論Bの授業で採用した同時配信での授業形態を「リアルタイム型」とよんでおく。

（２）ただし，たとえば教室などで黒板やホワイトボードのまえに立ち，授業を録画あるいは配信する場合には，教師のふるまいも，画面上でしめされるだろう。

（３）ここでは，教師と学生のあいだで情報のながれが一方向的でないあり方を双方向性，学生のあいだで対話やなんらかの活動，作業などをふくむあり方を協働性とよんでおく。